

東アジア四千年の永続農業

中国・朝鮮・日本 (上) (下)

F. H. King 著／杉本俊朗(横浜国立大学名誉教授) 訳

訳者序文

本訳書の底本は、Farmers of Forty Centuries or Permanent Agriculture in China, Korea and Japan by F. H. King, D. Sc., Madison, Wis., Mrs. F. H. King, 1911.

である。右の原著のほかにブルース教授 (Prof. J. P. Bruce) の編集せる版本がロンドンのジョナサン・ケイプ書店およびニューヨークのハーコート・ブレイス書店より一九二六年に出版されているが、これは原版を多少省略しており、写真もまた鮮明を欠いている。

著者キングは本書を執筆した当時 (一九一〇年) はウィスコンシン大学農業物理学教授であり、一時、合衆国農務省土壌管理部部長 (Chief of Division of Soil Management, U. S. Department of Agriculture) でもあったが、アメリカ農学界の耆き宿しゆくベイリー教授の緒言にある如く、原稿が印刷所に渡されようとしたとき (たぶん一九一一年) 急逝した。これ以上著者の履歴について、訳者は調べることはできなかったが、巻頭の肖像によって見るとすでに相当老年の学者であつたらしい。著書としては本書のほかに、未亡人の出版せる “Physics of Agriculture”, “Ventilation for Dwellings, Rural Schools and Stables”、マクミラン書店の出版せる “The Soil”, “Irrigation and Drainage”がある。このほかに東畑精一教授のご貸与くださった U. S. Dept. of Agriculture: List of Bulletins of the Agricultural Experiment Stations in the United States from their Establishment to the End of 1924.を調べたところ、Agricultural Experiment Station of the University of Wisconsin の項に次の如き著者の報告が発見された。

1. Comparative value of warm and cold water for milch cows in winter. Oct., 1889.
2. The construction of silos. July, 1891.
3. Destructive effects of winds on sandy soils and light sandy loams, with method for protection. Oct., 1894.
4. The agricultural, horticultural, and livestock features of a portion of Wisconsin Tributary to Superior: The agricultural possibilities of Douglas County and northwest Wisconsin. Jan., 1895.
5. The construction of silos and the making and handling of silage. May, 1897.
6. One year's of work done by a sixteen foot geared windmill. June, 1898.

7. Construction of cheese curing rooms for maintaining temperature of 58° to 68° .Jan.,1899.
8. Principles of construction and maintenance of country roads. Sept.,1899.8.
9. The character and treatment of swamp or humus soil(with J. A. Jeffery). Jan., 1900.
10. Silage and the construction of modern silos. May,1900.
11. Experiments in grinding with small steel feed mills(with J. A. Jeffery). Apr., 1900.
12. Development and distribution of nitrates and other soluble salts in cultivated soils(with A. R. Whitson). Mar., 1901.
13. Development and distribution of nitrates in cultivated soils(with A. R. Whitson). May, 1902.

本書の内容を通じてみても、右の著書、報告の標題によっても、著者の専門は土壌学、肥料学、農業土木学であり、著者が農政学者にあらざることは明らかである。

本書は著者の見聞せる東亜農業の観察記であって、アメリカ的農法の立場から停滞的にして原始的なる東亜農業をアプリーシエイト [理解、評価] したものである。本書の副題にいう (「永続農業」 Permanent Agriculture) とは四千年の昔から同じような方法をもって停滞的に営まれている農業という意味であって、このアメリカ農学者の創作になる表現と思われる。しかしながら著者は東亜農業の実践を決して低く評価してはいない。集約耕作、廃物の利用、時間の節約等々に表現される東亜農業の特質は、将来のアメリカ農業にとっても学ぶべきものとして顧みなければならぬというのがその結論である。もともと著者は農政学者ではないから、「永続農業」の分析を通じて東亜農業とアメリカ農業の社会経済関

うら

係を比較するまでに筆を進めていないし、その観察が技術方面に限られている憾みがある。

とはいえ、そういう観察である点にまた本書の価値もある。蓋し本書以前に東亜農業の自然的条件や技術につき、これといった著書はないからである。しかも著者は自ら撮影せる多数の写真により本文の説明を補足しており、この写真自体、一九〇九年当時の東亜農業の実態の記録として貴重なものである。さればこそワグナーもその著書『中国農書』の随所に本書を利用し、引用しているのであるが、ワグナーの方が体系的であることはいうまでもない。したがって読者は本書とともにワグナーの著書を併読されんことをお勧めする。

著者の視察旅行の日程を本書の叙述に従ってまとめてみると、次のとおりである。

一九〇九年 (明治四十二年) 二月二日 シアトル発——同月十九日横浜着——東京近郊見学——同月二十一日横浜発——同月二十三日神戸着——阪神近郊見学——同月二十四日神戸発——二十五日門司着——二十六日門司発——同日長崎着——二十七日長崎発。

三月一日上海着——四日上海発——七日香港着——八日香港発——九日広東着——十日

広東発——梧州・三水方面を見学し、広東に帰来 十五日広東発——十六日香港発——二十日上海着。

三月三十一日上海発、昆山に向かう。以後一ヵ月半の行動は記載なく、不明。

五月十五日上海発——青島——済南——青島——上海。この間山東農村を見学す。

六月六日上海発——青島——芝罘——天津。

六月十日天津着——十八日奉天着——十九日奉天発——二十二日安東発——二十三日釜山着。

六月二十四日門司着——同日長崎着——以後福岡を経て、二十九日九州を離れ、三十日下関着——明石を経て、大阪に到着。

七月三日大阪発——和歌山——奈良——京都。

七月七日京都発——安城——十日静岡発——東京。

七月十七日千葉県を見学。

以上がキングの足跡で、彼は四ヵ月半の間日本、中国、満州、朝鮮の農業を見学したわけである。

日本における著者の行動について当時の農会報等を調べてみたが、不幸にして該当記事を発見できなかった。大内兵衛先生を介して石黒忠篤先生にお尋ねしたところ、キングは来朝当初農商務省にあいさつのため訪れ、案内を所望したので、石黒先生は同僚の川口順次郎という人（本書中に出てくる川口博士 Dr. Kawaguchi 〈明治三十七年北大農経卒〉であるが、いうところのドクターが博士か学士かは確かめ得なかった）〔農学士、農商務省技師〕を案内役として随行せしめた由である。離日に先立ち、謝礼のため再び農商務省を訪れ、日本農業の停滞的なるのに驚いたような意味の感想を漏らしていったという。

最後に本書訳出の経緯について長文ながら事情を明らかにしておく。本書の価値に鑑み、支那事変〔蘆溝橋事件〕後邦訳計画はまず生活社において立てられ、満鉄調査部の三輪武氏が着手され、広告はすでに早くより発表されていた。然るになかなか出版されぬところから慶應書房もまた出版を計画し、昭和十五年夏当時、慶應義塾大学経済学部学生であった茂木六郎、米谷庄八、森下博治の三君がおのおの分担して訳出した。すなわち茂木君は緒言より第七章まで、米谷君は第八章より第十二章まで、森下君は第十三章より第十七章まで分担し、すでに同年十月より初校が出始めたのである。然るに訳稿につき疑念も存するゆえとて慶應書房より人〔遊部久蔵と豊田四郎（当時慶應義塾大学助手）〕を介して私に初校の閲読を求めてきた。私は本書の訳出はすでに生活社において行なっているはずであるからとて、一応旧知の生活社編集部前田広紀氏に問い合わせたところ、三輪氏の訳業は約三分の一で停滞しているとのことであった。そこで生活社と慶應書房との話し合いにより、生活社は中止することになったのである。

かく話が定まった上に当時私は余暇があったので、訳者のご希望に応じ、浅学をも顧みず、一応目を通した。一読したところその訳稿をそのまま出版することは適当ならずと認

め、初校刷りを訂正して原稿とすべきことを訳者と書肆に勧め、結局私の意見が入れられ、訳者等の懇望により十五年秋より引き続き私が初校全体を訂正、加筆し始めたのであるが、その間私も就職し、多忙となり、その上校正刷りを原稿となすには技術上なかなか制約があり、思うように訂正も徹底し得ず、ようやく十六年十一月訂正を終わり、十七年三月本文は校了となり、紙型にとったのである。残る写真の割り付け、説明、製版は私の個人的事情〔十七年四月、治安維持法により検挙されたため（同年十二月に起訴猶予にて釈放）〕により遅延し、十八年七月写真製版は完了した。然るに一方、出版書肆慶應書房は〔当局の強制により〕本年七月をもって出版事業を中止し、本書の出版に関する一切は栗田書店

じんぜん けみ

の継承するところとなった。かくして本書の訳出より出版に至るまで荏苒満三カ年を閲したのである。

その間、共訳者のうち米谷、森下両君は学窓を出でて後応召し、茂木君また遠く台湾の任地に赴き、書肆との連絡は一切私が担当したため、出版会関係の諸届けにつき原訳者諸氏の捺印を容易に得ることができなかつたことなどよりして私が訳者の名を僭称するのやむなきに至った。もっとも前述の如く訳文については私にも相当の責任があり、また訳者諸氏より私に共訳者として名前を列してほしいとの希望もあつたのであるが、初めより私一人が訳者の名を僭するはずではなかつた。この点を読者諸氏はよくご了解くだされ、前記三氏の努力を高く評価されんことを請う次第である。

さて本書の写真、付図は、原著においては本文がアート紙であるので、すべて本文中に入れており、その数も二四八の多数に上っている。然るにそのうちには本文の叙述に無関係のものもあり、日本に関するものにはわれわれにとり極めて陳腐なものが多い。例えば子守り、芸者、清水寺、桜等々がそれである。現状ではアート紙も節約を要するので、右の如きものは掲載を見合わせ、かつまた製本の便宜上各章ごとにまとめて挿入することとした。割愛せる写真は約四〇で、いずれも本質的なものではない。写真の多くはキング自ら撮影したものであるが、素人写真であるから相当不鮮明なものが多く、さらにそれを複写したので、ますます鮮明を欠いている。したがって本文で説明している対象が写真において判然としないものもあろうが、諒とせられたい。〔本復刊本では写真は全て原著同様に掲載した〕

索引は原著にもあるが、あまり感心できぬので、茂木君の取ったカードを参考にしつつ、私がさらにカードを作成し、これを事項、人名、地名の三つに分かつて作ったが、別に工夫を加えたものではなく、ごく普通の羅列的、便宜的なものにすぎない。巻末の地図は原著にはないが、読者の便宜のため著者の旅行経路と本文に現れる地名を示すごく簡単なものを付けておいた。

終わりに著者来朝時の模様につきご教示を賜った石黒忠篤先生および仲介の労をとられた大内兵衛先生、著者の履歴につきお調べくださった東畑精一先生のご厚情に対し心からお礼を申し上げるとともに、さらにまたすでに進行中の訳業を中止して本訳書出版の機会

を与えられた三輪孝氏、前田広紀氏に対しては、この機会に出版の遅延をお詫びしたい。
また出版について種々ご配慮くださった慶應書房岩崎徹太氏および栗田書店永田周作氏にも
もここにお礼を申し上げたい。

昭和十八年十二月